



俳句

キューバにおける
俳句運動

文学グループ及び
プロジェクト

キューバの俳人たちへのインタビュー

日本から世界へ

五、七、五、この17音が定義上は俳句を構成します。明治以降俳句は西洋にも広まり、今日では、世界で通じる普遍的な言葉となりましたが、キューバでも例外ではありません。日本では、日本語で書かれた伝統的な「俳句」（漢字表記）と、5・7・5の音からはみ出す自由を認め、世界の言語に順応し無限にその表現の可能性を広げたカタカナ表記の「ハイク」を分けて考えることがあります。しかし、どちらもその本質が、生活の中における自然との対話であることに変わりはありません。

キューバにおける俳句

俳句という単語は、エドゥアルド・ベネット・カステジョン（1879-1965）の「キューバにおける俳諧の試み（Ensayo de haikai antillano）」と「俳諧の手提げ袋（Un jabuquito de haikais）」という本を通し初めてキューバに紹介されたそうです。その後は、詩人であり絵描きでもあったサムエル・フェイホ（1914-1992）の「俳句の話（Asuntos de Haiku）」で言及され、キューバの国民的詩人ニコラス・ギジェン（1909-1989）にも取り扱われたと、スペイン語圏の俳句雑誌「俳句の片隅（Rincón del Haiku）」は説明しています。

眠る海 / 波のふるいに / 落ちる星
En la mar dormida / un tamiz de agua / los luceros criba.

エドゥアルド・ベネット・カステジョン

強雷と / 冷たい道に / あられ太鼓
Truenos enormes. / Camino frío. / Granizo con un tambor.

サムエル・フェイホ

かごの中 / 一羽うとうと / 紙の鳥
Sola, en su jaula mínima, / dormitando, / la pajarita de papel.

ニコラス・ギジェン



加藤素毛

<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/57430>

驚くべきことに、これらの詩人がキューバの自然を俳句にする前に、キューバを謳った俳句が存在していました。加藤素毛（1825-1879）は、1860年に江戸幕府が派遣した遣米使節団の一員としてキューバ沖合を船で通った際に、次の俳句を詠んでいます。

島山を / 照らして見せよ / 春の月 (Luna de primavera / con tu luz hazme ver / la montañosa isla)

この俳句についての研究は吉村郁久代氏によって行われ、ビセンテ・アヤ先生²の監督の下、2000年代にキューバで俳句を深め発展させたホルヘ・ブラウリオ・ロドリゲス・キンタナ先生によって翻訳されました。ブラウリオ先生はあえて自分の翻訳をアヤ先生に送った逸話を紹介し、互いに読み合い、批評すること自体が俳句の一部であることを強調した上で、アヤ先生の優しさに感謝しました。そして、加藤素毛が詠んだキューバに関する最初の句が、同国の英雄ホセ・マルティが

¹<https://nueva.elrincondelhaiku.org/2019/10/02/el-haiku-en-cuba/>

²ビセンテ・アヤ：スペイン・セビージャ大学日本講座の創設者及び教授。スペイン語圏の俳句の師匠とされ、30冊以上の書籍を日本語を含む様々な言語で出版している。

手記「ハイチの先端から二つの河へ」の中で詠んだ句と同じように、春の月に照らされる海から見たキューバを題材としている偶然について、感慨深く語りました。

入り江際 / 雲よりのぞく / 赤い月 Rumbo al abra. / La luna asoma, roja, / bajo una nube.

ホセ・マルティ

「ブラウリオ先生をキューバの現代俳句運動の創始者と呼ぶことに対し、まったく異論はありません。」と、「朝日の俳人たち (Haijines del Sol Naciente)」というグループをビジャ・クララ県で創設したマイラ・ロサ・ソリス・サントス氏は語ります。彼女が歩んできた俳句の道のりで、ブラウリオ先生は重要なつながりであり、先生のブログや俳句に関する本、先生が行ってきたセミナー等、すべてが彼女の活動を開始するための参考になったと言います。彼女は第1回スペイン「日本の秋 (Un otoño japonés)」国際俳句大会 (2020) 優秀賞など、俳句の国際賞で複数受賞しており、スペイン圏の国々で自作の句を出版しています。

天気雨 / 干したおむつに / てんとう虫 Lluve con sol / sobre el pañal tendido / la mariquita

マイラ・ロサ・ソリス・サントス

「キューバの現代俳句の創始者であり、国際的にも真っ先に認められたのは間違いなくブラウリオ先生です。」と吉野山プロジェクトの創始者で、国内外で多くの出版を行っているラサロ・アルフォンソ・ディアス・カラ氏も答えました。ディアス氏は、サンティアゴ・デ・クーバ県で「俳句を想う (Pensar en Haiku)」というグループを創設した写真家兼俳人のジュリエル・カスト・ペレス氏が運営している国際俳句大会「赤い月 (La Luna Roja)」の審査員も務めています。2017年から毎年開始されている同国際大会ですが、2022年には世界16か国 (スペイン語圏) から136名が参加しました。



ジュリエル・カスト氏とサンティアゴ・デ・クーバ県における文学プロジェクトの青年たち



ラサロ・アルフォンソ・ディアス・カラ氏

二、三枚 / 雲間と水に / 震える葉 Apenas tiemblan / Entre el agua y las nubes / Dos o tres hojas.

ジュリエル・カスト・ペレス

露しずく / 器に落ちる / 牛の乳 Gotas de rocío / La leche de la ubre / cae en la vasija.

ラサロ・アルフォンソ・ディアス・カラ



プロジェクト「俳句を想う (Pensar en Haiku)」の俳句と絵のワークショップ

俳句の普及を「やめてはいないけれど、私はもう引退した」、と言うブラウリオ先生を師と仰ぐ彼らは、今日ブラウリオ先生よりも積極的に俳句の普及に努めています。それは、先生自身も認めているところです。「コロナ禍は私を含め、皆を止めてしまったけれど、そろそろセミナーを再開しないといけません」と苦笑します。2022年、ジュリエル・カスト氏の生徒2名が、日本で実施された第4回ハポン支倉常長俳句賞の、児童及び青年の部でそれぞれ最優秀賞を獲得し、日本とスペイン語圏の人々の関係強化と青少年層への俳句の普及に貢献しました。キューバの詩の感受性と質が、世界レベルに達していることが見受けられます。

冬の夜 / 一人ぼっちの / 丸い月

Noche de invierno / La luna llena / Ha quedado sola

マイラ・デ・ヘスス・エルナンデス・マトス

ロレナ・パルマ・テイラー

新学期 / ノートを覗く / みつばちよ

Primer día de clases / Rondando los cuadernos / Una abeja

ホルヘ・ブラウリオ・ロドリゲス・キンタナ先生

ホルヘ・ブラウリオ・ロドリゲス・キンタナ先生は芸術史を学び「芸術と社会文化の活性化」で修士を取得した造形美術家です。美術の先生としての彼の職歴をいくつか挙げると、プラサ・デ・ラ・レボルシオン市美術専門初等教育学校創設理事、サン・アレハンドロ美術学校学長、造形美術開発センター長、芸術大学造形美術学部長等があります。芸術家としては、キューバ国内外で多くの個展を開いてきました。「表現する」という意味では、文学も芸術であり、芸術家が美術から文学へ転換するのは、ある意味自然なこともかもしれません。ブラウリオ先生の場合、彼の心を掴み人生を変えたのは、「俳句の片隅」というサイトで見つけた17音節だったのです。先生はこのサイトで俳句を学び始め、日系人が多く住むブラジルの俳句グループとつながりを築き、徐々に腕を上げて自分で俳句を教え広めるようになりました。ブラウリオ先生は、「俳句の主役は詩人ではなく、詠み手に耳を傾け、俳句を一緒に作り批評しあえる聞き手なのです」と説明します。「俳句にエゴはありません。」と。そして、この要素をキューバの現代詩人に理解してもらうのは容易ではなかったと振り返ります。「キューバでは、詩は自分が感じたことを表現するために存在すると考えられています。しかし、俳句は『観察者』になることを要求します。俳句の主人公は人間も含む自然であり、自然との相互作用や自然に対する自己の反応を意識しなければなりません。」

ブラウリオ先生は、芸術大学の広大な庭や、国立植物園、ハバナ・メトロポリタン公園などで、聞き手と詠み手のいるグループでセミナーを実施してきました。「俳句はそのひとときを永遠の美と感動のビジョンに変えるのです。その場の状況に身を任せ、詩人はただ見て、聞いて、自然の中にある対照的な二つの要素を探せばいいのです。俳句は、絶え間なく変化する自然の一瞬を言葉に記憶する芸術なのです。」と説明します。

ブラウリオ先生によると「他の種類の詩人とは逆に、子供たちは俳句の達人」だそうです。子供たちとのセミナーでは、まず参加者に自然の中で怖いもの、触りたいもの、驚いたことなどのリストを作成してもらいます。最初は音の数を気にせず、とにかくシンプルに、哲学的・理論的な説明を省くことから始めます。「俳句に説明はいらないのです」と強調します。



松尾芭蕉の「奥の細道」を辿るホルヘ・ブラウリオ先生

冬の海 / 波ともどもに / 返る鳩
Mar invernal / Retrocede el palomo / ante la ola

燃ゆる畑 / 軽く飛び行く / 雲の影
Leve, la sombra / de la nube a través / del campo en llamas

妹の / 額に息吹く / 暑い朝
Sopla la frente / de su hermana menor / Mañana cálida

ホルヘ・ブラウリオ・ロドリゲス・キンタナ



ホルヘ・ブラウリオ先生の作品

俳句に添えられる俳画については、「語るのではなく見せること」と話し、改めて造形美術家が俳句に惹かれるのは自然のことなのだと考えさせます。

5、7、5のリズムがマンボや、ルンバ、チャチャチャのリズムと共感するのか、もしくはキューバ特有の動植物が芸術家達の目を魅了してやまないのか、俳句は様々な年代のキューバの芸術家と詩人の心を掴みました。この国が直面する困難にもかかわらず、国際コンクールに参加し、たくさんの俳句を国内外で発表してきているキューバの詩人たちの努力と情熱は注目に値します。

俳人を含む芸術家たちのインスピレーションが、困難な現実にあるのか、過去へのノスタルジーにあるのか、時折海岸に大きく打ち寄せ自然の強大さを思い出させる波にあるのか、時間の経過と劣化に関わらず溢れる文化遺産にあるのか、それはわかりません。確かなのは、五、七、五の三節が、この小さなカリブ海の島の唯一の瞬間を記録し、キューバの詩の世界へ貢献を続けていくことです。



在キューバ日本国大使館
広報文化班